

# 文化

同人誌小説には夫婦とは何かをテーマにした作品が多い。

「あるかいど」64(大阪市阿倍野区丸山通2の4の10の203・高皇方)高原あふち「人間病患者」。50代後半の博と貴子夫妻の関係は冷え切っていた。30歳の娘海音はアルバイトをしながら劇団に所属、27歳の息子律はニューヨークでピアニストとして活躍中だ。

ある日、博に父・香久山から電話が。父は離婚し家を出たが、母が亡くなるまで妻子に仕送りをつけ、現在は一人暮らしという。20年ぶりに聞く父の声。専

## 同人誌 夫婦とは何かを問う

属の良いヘルパーを紹介してほしいという用件だった。博は海音にアルバイトとして頼む。互いに気を遣うだろうと、どちらにも素性を教えなかった。同じころ風邪をひいた貴子は自分を心配する博に戸惑うが、病院の帰りに気遣う電話をしてきた博に「ありがとう」と答える。

海音は掃除洗濯、買い物などをこなす。香久山には若い女性がいる空間は温かく、銀行に付き添ってもらった後に2人で河畔を歩くと、川が体の中を流れているような心地よさを感じる。その後、海音が孫と知り博に確かめる一方で、自然体を望み、海音には伝えないように頼む。

律が子連れで外国人妻エマと帰った日、海音は恋人未満だった。一ノ瀬との関係が家族公認と異なる。そして翌日、香久山は逝った。人生の先行きを悲観せず、良いことがあると思つて生きてほしいと切実に訴える秀作だ。同誌の西田恵理子「親指の爪」。関西弁による味のある物語が印象に残った。

都会で孤独に生きながらも、人と人との深い絆の存在を感じさせる好編だ。同誌の島田奈穂子「手のなかの小鳥」。400字詰め原稿用紙約150枚の力作であり、秀作だ。表題「手のなかの小鳥」の主人公である私は、身近な人は別にして相手の言うことも理解できるが、物心ついたときからうまく返答できずメモ帳で筆談する。小さな鳥の死骸や私の口から吐き出される小鳥などが「純粋な気持ちの屍の暗喩(メタファー)」としての巧みさが煙めく物語だ。また主人公を取り巻く人物創造も巧みだ。

「文の鳥」創刊号(西宮市段上町6の11の15・笹部方)。書きたいという熱き思いを結集させた同人誌だろう。北漢バム「パパちゃんちちゃん」。表題が何のことと面白く読み出した。小説望で目下失業中の俺は、専ら2歳年下の嫁に食わせられている。嫁がやけに太くなったと思つたら妊娠し、しい。だが一年以上ご無沙汰から、おかしい。会社の上の不倫の子で、産むという。妙なタッチで、典型的な駄作の悲哀がにじむアイロニー法による作品として読んだ。同誌の凧和「省三」。とは、男が女と散策中に見て飼っているミシシッピアミガメの名前。特異な経緯棲した男の専業主夫ぶりが面白い。(野元 正・作)

律が子連れで外国人妻エマと帰った日、海音は恋人未満だった。一ノ瀬との関係が家族公認と異なる。そして翌日、香久山は逝った。人生の先行きを悲観せず、良いことがあると思つて生きてほしいと切実に訴える秀作だ。同誌の西田恵理子「親指の爪」。関西弁による味のある物語が印象に残った。